

『私はある』という方を信じる ヨハネ福音書8章21～30節

細井 茂徳

エルサレムの神殿、仮庵の祭りの終わりに、主イエスは衝撃的な宣告をなさいました。「あなたがたは自分の罪のうちに死ぬことになる」(24)。この「罪(ハマルティア)」とは、道徳的な過ち以前に、人生の「的」を外している状態、すなわち造り主である神から離反した状態を指します。私たちは自らの力で人生を歩んでいるつもりでも、実際は「下から出た」地上の理屈という慣性に支配され、神という中心からズレたまま滅びへと突き進んでいます。自力ではこの死の慣性を止めることはできないのです。

主は言われました。「あなたがたは下から出た者だが、私は上から来た者である」(23)。この「下」の閉鎖されたシステムの中に、救いの道はありません。そこに、全く別の次元である「上」から、キリストが垂直に介入してこられました。私たちが冰山へと突き進むタイタニック号のように、罪の慣性で止まらない絶望の中にいるとき、主は十字架という「直角の愛」をもって、私たちの破滅的な直進を食い止めてくださるのです。

今日の箇所のコアは、「私が『私はある』であることを信じないならば」という“主の宣言”にあります。この「私はある」という言葉には述語がありません。これは、出エジプト記(3:14)で神がご自身の御名を明かされた「ヤーウェ(私は有って有る者)」と同じ、絶対的な神性の表明です。イエス・キリストは、単なる歴史上の偉人ではなく、今この瞬間に「有る」ところの、存在の根源である神ご自身です。このお方を神として受け入れない限り、人は自分の罪を背負ったまま死ぬほかないのです。

主は「人の子を上げたとき」(28)、人々はその正体を知ると言われました。それは、主が私たちの罪を身代わりに背負い、十字架に高く上げられる姿です。無残な敗北に見えるその十字架こそが、神の圧倒的な愛の顕現であり、私たちの慣性を打ち破る救いの力です。主は今もあなたの心の扉を叩いておられます。「いつか」という先延ばしを捨て、今、この『私はある』と言われるお方に人生のハンドルを委ねてまいりましょう。扉を開ける決断の先に、新しい命の歩みが始まります…。